韓国を題材にした授業の紹介

岩鼻　通明
（農学部　生物環境学科）

1. はじめに

1996年度の教養部改組以前から，一般教育を主として担当する者として，授業改善の試みを今日まで続けてきた。1983年の教養部赴任以来，10年近くは地理学概論的な講義を続けてきたが，一般教育科目が自由選択へ以降した前年の1992年度から，多様な内容を提供できるように変えはじめた。

1994年から年に数回の訪韓を重ねてきたが，講義で韓国に関する話題を提供できるようになったのは，1995年度から総合領域で有志と始めた「平和と人権」の中でのことだった。この講義は，2002年度まで断続的に行ったが，1998年夏に日本学術振興会の韓国短期派遣の機会が得られ，それを契機に1999年度以降は「韓国の文化と民俗」などと題した授業を続けてきている。

この間に，南北および日朝首脳会談やW杯サッカーの日韓共同開催，さらには「冬ソナ」ブームなどが相次ぎ，韓国への関心は，過去にないほどの高まりをみせ，韓流と呼ばれるまでに至っている。それを受けて学生に基礎的かつ最新の情報を提供するべく工夫を続けてきたが，たとえば，授業で「ペパーミント・キャンディー」という光州事件を題材にした韓国映画を鑑賞したところ，毎回集めるコメントで，受講生の誰一人として，光州事件に触れた者はいなかった。

このように，韓国人にとっては常識的なことでも，日本人には欠けている基礎知識は少なくない。21世紀の未来を担う若者たちに，世界平和の前提となる国際的な相互理解の芽を育てることもまた，我々大学教員の任務のひとつといえよう。

2. 韓国映画との出会い

この10年ほど，教養教育では韓国に関する講義を続けてきたが，教養教育の枠組みそのものが大きく見直されることもあるので，そろそろ，講義の枠組みも変えていきたいと考えている。韓国については，最初の研究者派遣から10年で，『韓国・伝統文化のたび』と題した著作をナカニシヤ出版から2008年春に刊行することができた。当初は地理学の立場からの地域研究に関心があったのだが，ある出会いを契機に韓国映画へと関心が傾いていった。

それが，韓国を代表する男優であるチェ・ミンシク氏との出会いだった。2001年夏に日韓文化交流基金による２度目の研究者派遣で，韓国農村の伝統的町並み調査に各地を訪ね歩いたのだが，慶州郊外にある良洞マウルに出かけた際，ソウルからの特急列車の車内で映画「シュリ」を見ていて，目的地に着くと，映画の中で見た人物が，すぐそこに立っていたのだ。彼こそが，「シュリ」で印象に残る北朝鮮のスパイ役を演じたチェ・ミンシク氏で，ちょうど「酔画仙」と題された新作映画の撮影が，この伝統的景観の残る村で行われていたのだ。韓国映画界の長老である林権沢監督の，この作品は完成後に韓国映画として初のカンヌ映画祭監督賞を受賞するに至った。

これ以降，後期には韓国映画を通した講義を始めたが，近年は映画を通した地域活性化に関心を持ちはじめ，山形国際ドキュメンタリー映画祭や，フィルム・コミッションのボランティアの実体験を通しながら，如何に地域貢献が可能であるかを模索しており，2006年度からは，農学部１年生を対象とした「文化地理学」の講義内容を，それらを反映したものに変えていて，他学部の教養教育にも開かれた形にしている。

3. 具体的事例の紹介

では，具体的な授業の内容を紹介しよう。教養教

育の前期の講義では，韓国に対する概括的な知識を伝えることに重点を置き，後期は前期よりも少人数を対象にして，韓国映画を通して韓国の文化や社会を知ることを目的としてきた。

前期の講義は，どうしても毎年，似たような話題になることもしばしばであるが，なるべく自分自身でも変化をつけようと，硬軟の変化を一年おきにつけている。たとえば，2007年度は，最初に朝鮮半島の風土に触れ，ついで，南北分断が続く現状を解説し，続いて，男性の兵役が義務であることを指摘し，教育面でも日本以上の学歴社会であることを説明した後で，韓国の伝統音楽と現代音楽を比較して紹介し，映画やアニメの話題へと続けていった。

それに対して，2008年度は，植民地支配と南北分断の歴史的説明の後に，在日コリアンの問題に触れ，教材として韓国人監督によるドキュメンタリー映画「ウリ・ハッキョ」を鑑賞したところ，好評であった。この映画は，韓国人監督が札幌の朝鮮学校を長期間にわたって取材したもので，いわば北朝鮮の影響下にある民族学校を韓国人が長期取材すること自体が2000年の南北首脳会談以前は考えられなかったことといえよう。拉致問題で抗議者が押し寄せた新潟港から北朝鮮へ向けての修学旅行に出発する生徒たちを見送る場面で，同行を許されなかった韓国人の監督がはじめて南北分断を実感したと語る事実は，現代の韓国人の分断に対する認識を象徴しているのであるが，そのあたりはどの程度，受講生に伝わったのであろうか。

一方，後期は教養教育補助経費の支援を受けながら，教材の韓国映画ビデオをそろえてきたのであるが，こちらは毎年，異なる韓国映画もしくは韓国と関わりのある日本映画をビデオで鑑賞してきた。

たとえば，2007年は「力道山」，「風のファイター」，「夜を賭けて」，「愛の黙示録」，「あなたを忘れない」，「チルソクの夏」を鑑賞した。いずれも，日韓の関わりを描いた作品で，テーマの共通性から選んだものである。2008年は「シュリ」，「スパイ　リー・チョルジン」，「スパイ・ガール」，「踊るJSA」，「DMZ」，「ウエディング・キャンペーン」，「約束」を鑑賞した。これらはいずれも，南北分断の現実を表現した作品であるが，悲劇的内容のものにとどまらず，喜劇的な作品も織り交ぜて，韓国映画の多様性を知ってもらうように努めた。

毎年，講義内容に変化をもたせていることから，継続的な履修が可能になるように，授業科目名を少しずつ変えており，とりわけ後期の授業は数年間続けて履修した学生が存在した。ただ，近年は領域ごとの履修単位の上限が定められるようになって，継続的な履修が困難になりつつあることが惜しまれる。

4. おわりに

以上，韓国を題材とした教養教育について述べてきたが，2010年度から山形大学の教養教育は大きく変わろうとしている。そのために，新たな教養教育の枠組みの中で，これまでの内容をさらに充実させる方向を模索したいと考えている。

とりわけ，映画を媒介とした日韓の比較の中で，地域貢献の可能性を追い求めていきたいものである。この2009年秋には，山形国際ドキュメンタリー映画祭が開催されるので，教育の場としての活用を積極的に試みたいと考えている。

では，以上，執筆の機会を与えていただいた高等教育研究企画センターの方々に感謝して稿を終えたい。